季節を知る

冬から春へ、春から夏へ、それぞれの季節が緩やかに移行する瀬戸内の温暖な気候の中で育った私は、折々の季節を知ると言うことに関して、鋭敏に反応できない。まして、店先に並べられた季節感なき商品は、『旬』という感覚さえも、私の中から葬り去ろうともしていた。そんな私に、季節を知らしめたのは、越後高田で過ごした４年間の大学生活であったろうか。

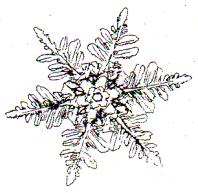
◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

『この下に高田あり』

天和元年、厳寒の高田を訪れた飛脚は、この高札によって高田の存在を知ったという。一夜で１ｍを越す降雪などは日常茶飯事であり、市内の積雪は３ｍを優に越す。夜明けと共に、水を含んだ雪は人家の屋根を圧し、時としては家屋の土台もろとも押し動かす。雪は怖いものだ……雪降る里で暮らす人々の、染み付いた生活感覚でもある。

白と黒の水墨画のような世界に、突然として色彩が蘇る…。春の到来である。書道科のあった高田城跡の掘割の桜は、爛漫として咲き誇る。冬がどんなに長く厳しかろうが、必ず巡り来る春…。待ち兼ねた春に向かって人々は気を開放し、万物は生動する。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇



紙棚から、一枚の紙を抜き取る。純白の光沢をもったこの紙には、寒漉き特有の緊張感がある。季節を体感する…２０年も前に知らされた感覚である。暦や数量的計測によって定義づけるのではない、人間が、生物が、肌で感じとっていく季節の移り変わりを、私は筆で確かめながら今日も生きている。

(1990.4.13)